

「そもさん」

「説破……なんですの突然」

トレーナー室で待機中、ジエンティルドンナは唐突に声をかけられる。声の主はもちろんのこと彼女が信を置くトレーナーだった。

「一応、レース前だから緊張してるかなって」

「……この私が？」

わずかな沈黙の後に言い返してくるドンナを微笑ましく見ながら言葉を紡ぐ。

「レースの前だけど、どうしても聞いておきたい事があつて」

「たかが学内と言えどレースはレース、事前に乱されるような事はごめんですわ」

「それは大丈夫だよ、貴女を信じてる」

「……お気楽な事」

学内で行われるトウインクル・シリーズを退いたウマ娘で行われる定期的な草レース。参加

は自由だし、服装もレース用であれば勝負服でも汎用服でもジャージでも良い。

たとえ引退したウマ娘でも、ウマ娘はウマ娘である。走りたいという気持ちに変わりはないし、良い成績や能力次第ではドリームトロフィーリーグへの打診も当然ある。

「それで、内容は？」

「ああうん、そもさん！」

「しようもない人。説破」

「ジェンティルドンナというウマ娘、貴女は今、強い？」

一瞬にして空気が硬質化した。

茶化す口調ではない、が意図はわからない。

「これを見て」

トレーナーが机から両手で取り出したのは小さな黒い球。指で摘める程度の見た目に反してゴトリと重い音を立てて置かれた。

「これは貴女が全盛期に縮めた鉄球、ウマ娘としてピーカウトした今の状態であればこれと同じ物はもう作れない……それはトレーナーとして貴女を見ていればわかる事。かつての力はもうない。現役時代に言っていた、強さこそが正義とは今の貴女にある？」

「…………」

ジェンティルドンナは答えない。

「二年連続の年度代表ウマ娘、華々しい活躍とその栄光。ドバイシーマクラッシクも制して三

冠すら下したトリプルティアラのウマ娘……」

ジェンティルドンナの返事を待たずに続けていく。

「当然、ドリームトロフィーの参加要請も来てる。今さらこんな学内の草レースに出るまでもない。出てみようかと聞いたのは私だけども、異を唱えなかつたのも事実」

「ジェンティルドンナの視線が鉄球に注がれているのを感じる。」

「トレーニングも最低限で、最近は経営の勉強を熱心にしてる。家督を継ぐのか未だわからないけど実績は示したし、問題はないはず。それでも貴女は出走を拒まなかつた」

「今度はジェンティルドンナの持つてきた参考書を示す。そこには経営学などのおよそレースとは関係のない本が積まれている。」

「もちろんドリームトロフィーリーグに出れるのは光榮なことだし、さらなる実績にもなる。でも引退した以上はトウインクル・シリーズの頃の強さはもうない……なら本番レースに絞つて調整するべきだよ、こんな学内の草レースになんか構つてられない。G1級がオープン戦に出ることはないと」

「それはそう。」

「このレースに出る以上、私……トレーナーとしての目論見はある。けどそれは些細な事だし、何よりも後付けの理由。じゃあ、走る本人の目論見とは何か？」

「それを話した事はない。」

「ジェンティールは今の自分に自信がないんだ。トレーニングは最低限、勉強の方に力を入れている。ドリームトロフィーまではまだ時間が空いているけど、出ることは既定路線。ピークア

ウトを迎えて落ちる力、だから学内のレースという叩き台を作ることで今の自分を試そうとしてる……そうでしょう？」

まるで推理小説の探偵が犯人を追い詰めるような口調、獲物を追い詰めた猫科の大型動物を目に乗せてトレーナーはそう締めくくる。

ジェンティルドンナは口を閉ざしたまま、控室となつていてるトレーナー室には必然と沈黙が訪れる。

ジェンティルドンナの瞳がわずかに揺れ、やがて観念したかのように伏せられた。

「ふう、ウソは良くないわね。確かにそういう面もあるでしょう。レースからもしばらく遠ざかっているし、トレーニングもせいぜい維持する程度。一線を退いたウマ娘ですわ。でもそれはこれから未来を考えた場合、普通ではなくて？」

「それはつまり……この先の人生を考えた場合、数年しか活動できないレースに比重を置く時期は過ぎたと？」

「いいえ、これからも走り続けますわ。例えば貴女がトレーナーを辞めることがあつたとしても、ウマ娘をやることはできないもの」

「……今のトコ辞める予定はないけどね、これから何があるかはわからないけれども」

「貴女がトレーナーをやめる時は本格的に私の専属にしますわ。もつとも、私の専属になるからトレーナー業を退く、の方が早いかもしませんけど」

メジロ家のメイドたちの朝は早い。

メジロ家には別邸の方でも多くのウマ娘たちがいる。いくら名門であつたとしても、その誰もが等しく世に取り上げられる訳ではないから意外に思われるかもしれないが、すでに現役を退いた者も、これからトウインクル・シリーズの世界に飛び込んでいこうとする者も。

それを考えれば、あの大きな屋敷も決して余裕がある訳ではないだろう。

ともあれ、特にトレセン学園への入学を目指すまだ幼さの残る娘たちは、同じメジロを冠する先達に憧れ、目標とし、日々トレーニングに勤しんでいる。

毎日、季節によつては朝日が顔を覗かせるよりも早い時間から。

そうなれば家の仕事だけでなく、ウマ娘たちの身の回りの世話などもしているメイドたち、更には厨房を担当する者や何かあつた時のための専属医師など、多くの者がそれよりも早く起床し、準備をしておく必要がある。

故に、メジロ家のメイドたちの朝は早い。

Ω

時計のアラームが鳴ると同時に目を覚まし、慣れた手つきで電子音に引導を渡して身体を起こす。

少し身体が冷えているような感覚を覚えて眠い目を擦りながら周りを見ると、掛け布団がベッドという陸地から部屋の床という大海原へと旅立つていた。

のそりとベッドから降りて、旅好きな布団もいたものだと拾い上げ、在るべき場所に戻していく。

こんな所をばあや様に見られようものなら午前中はお説教だけで終わってしまいそうだけれど、さすがに就寝中の自室まで見られる事はないだろう。

ないといいな、と何かを確かめるように思いながら身支度を整えていく。

寝間着を勢いよく脱ぎ捨てていつものメイド服に。窓のカーテンを開けると、太陽は既にその仕事を始めているようで、広大な庭の緑が青々と葉を輝かせていた。

「相変わらず仕事熱心ですね。とはいえサキだつて今日は余裕を持つて……あれ？」

髪をまとめるために見ていた鏡、そこに映る時計に強烈な違和感が込み上げてきて、サキが恐る恐る振り返る。

——五時三〇分。

それを確認した瞬間、途中までまとめていた髪など最早どうでもいいと言わんばかりの勢いでベッドに転がつていたスマホを取る。

——五時三〇分。

ロック画面は部屋の時計が正確である事と同時に、スヌーズ機能による次のアラームまでの

時間も表示してくれていた。

「ご親切にどうもありがとうございます！」

叫びながら、音を立てるのも厭わずに部屋のドアを押し開いて廊下へ出ると、メイド服の長いスカートをもろともせずにサキが走り出した。

「どうしてこのお屋敷はこんなに広いんですか……！」

走りながら、まずどこへ向かうべきかを頭の中で考える。

広間か？ 廉房か？ リネン室か？

使用人たちの今日のスケジュールを思い出しながら、この時間であれば誰がどこにいるのかをシミュレーションしていく。

「サキ、入ります！」
寝起きとは思えない頭の回転。これも日々の仕事の賜だろう。

「まず何よりも優先すべきは、ばあや様がどこにいるのかという事。

それさえ解れば、後は自分がやるべき仕事の中からその場所を避ければいい。

そうして辿り着いた答え。早朝トレーニングに出られたお嬢様方をお迎えするためのタオルや着替えなどを用意する方に回るのが正解ルートだ。

「サキさん、後でお話があります」

「ヒイツ!? 不正解!?」

「うう、どうしてこんな事に」

いくつかある事務室の一つで書類の山に囲まれながら、サキはモニターに映る文字を眺めて項垂れていた。

「寝坊するからじゃないんですか？」

「今日はまた中々でしたね」

「早く寝たらしいと思います」

一緒に事務仕事をしているメイド仲間からの即座のツッコミが、サキに更なるダメージを与えていく。

一人一人が職人然とした使用者たちではあるが、こうしてメイドだけしかいない場だと、多少は雑談をしたりする事もある。もちろん、ウマ娘のお嬢様方やばあや様がいる前では絶対にそんな事はしない。使用者たちもまたプロフェッショナルなのだ。

しかし、数が多くなればどうしても例外というものは出てくる。

天利サキというメイドは文字通りメジロ家のメイドらしからぬ性格だと言えるだろう。慌てず騒がず、完璧な仕事でメジロの名を冠するウマ娘たちをサポートする使用者。彼ら彼女らもまた見る人から見れば憧憬の念を抱かれる存在。